

(そのとき、)徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「ある人に息子が二人いた。(中略)下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。(中略)兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』(以下略) —ルカ15章—

親のこころ

律法の知識があり、それを守っている者だけが救われる神に忠実な同胞と見なし、そうでない、いわゆる無法者は、共同体から外す、当時の宗教とその指導者たちの中であって、イエスの語り口は、貧しい人や病気の人、罪びとや差別された人を思いやり、重荷にあえぐ人、希望を失った人の友となる、いわゆる、人々の罪を見過ごされる、父なる神の憐み深い優しさでした。

前代未聞。そんなイエスの評判は、仲間外れにされていた徴税人や罪びとたちをしてイエスの所に、谷川の水を求める鹿のように、引き寄せたのです。汚れを厭う宗教は、当時、罪びとと関わることを厳しく禁じていましたから、イエスは当然、汚れにまみれた律法の破戒者と映ります。ここでイエスは、彼らの非を指摘するのではなく、彼らが自ら気づかざるを得ない警え話を穏やかに語りました。

父親の二人の息子、兄と弟は、宗教の指導者たちである「ファリサイ派や律法学者」と「徴税人や罪びと」を指しています。弟が、自分の欲望のままに父を離れて、手にした財産を使い果たしたあげく、惨めな姿で父のもとに帰ってきたその経過に、同情の余地はありません。それに対して、まじめに父に仕えてきた兄は申し分ありません。しかし、父親は弟を叱らず暖かく迎え入れました。兄はそれが許せませんでした。

ここまでの話には、誰も兄の態度に同情こそすれ、異論ははさまないでしょう。この後に発せられる父親の一言、「その心」を知らされるまでは！ 「お前のあの弟は、死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ」

私はかつて、相談もせず、ある日突然、自分の身の振り方を宣言して、出ていこうとしたことで母に注意されたとき、言い放ったのです。「8人も子供がおるんやから、一人位おらんようになってもおええやろっ」と。そのとき、字も読めない、書けない文盲の母は私に10本の指を見せて言いました。「お前はこの10本の指、小指が1本けがしたら痛くないのか？」と。今でも私は、この母の言葉を思い出す毎に後悔の念に襲われるのです。「どこの世界に、自分の子どもの一人くらいいなくなっても平気でいられる親がいるだろうか」と。



福音書のたとえ話は、罪びとが神に立ち返り、模範的だった宗教の指導者たちが神から離れた話なのです。